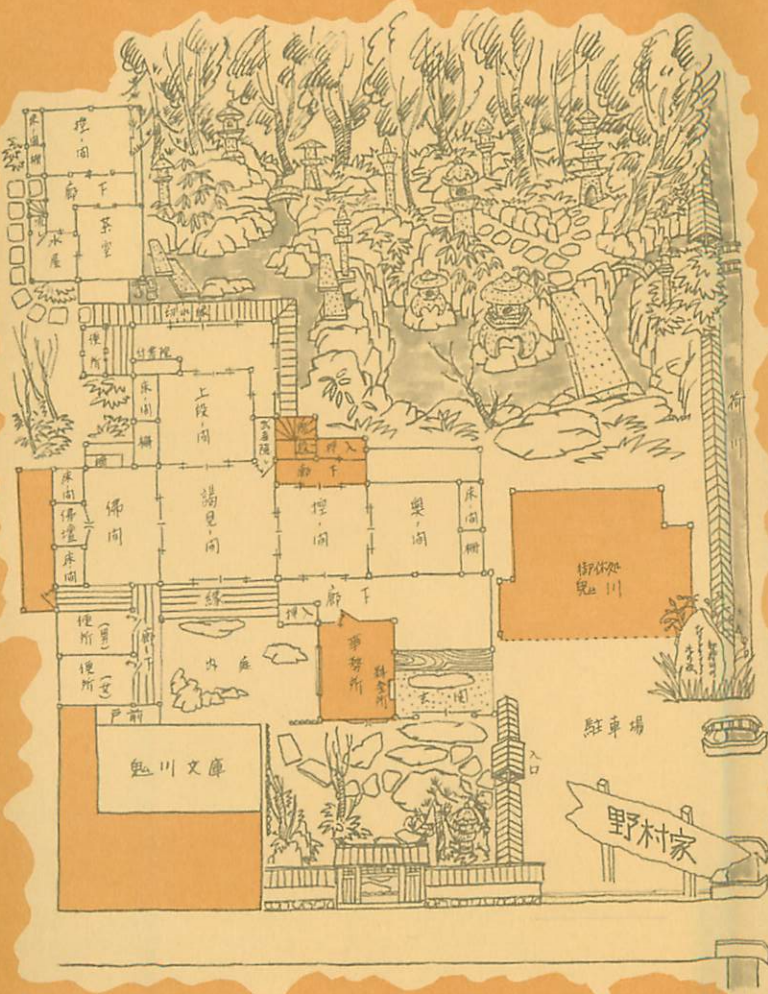
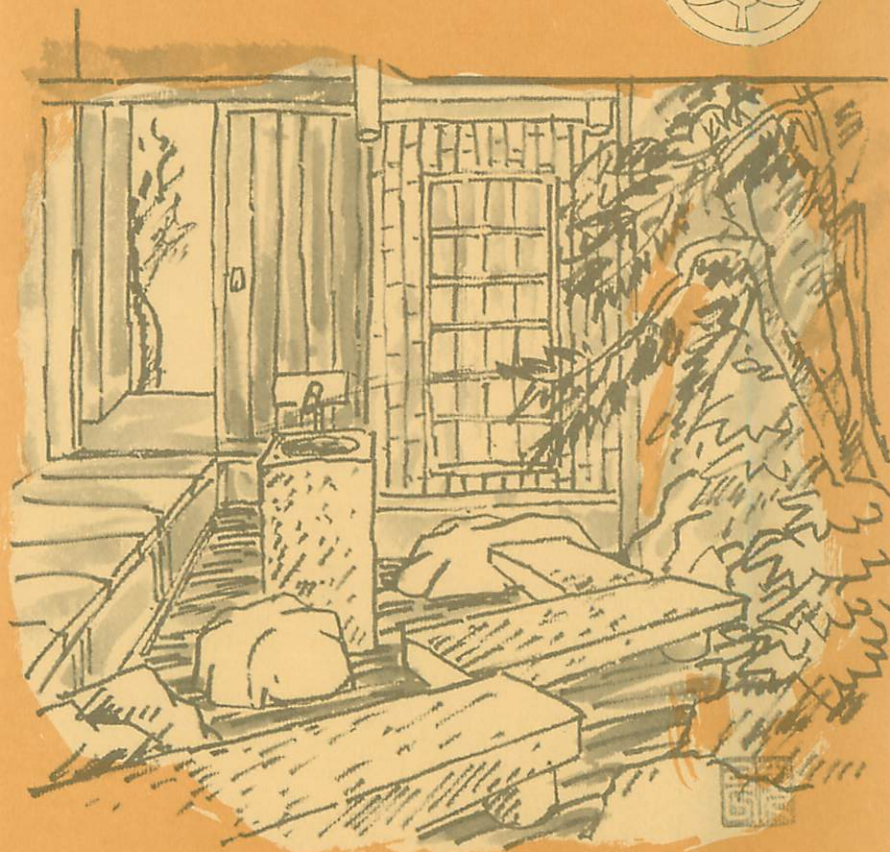


武家屋敷跡

加賀藩 二百石 野村家



碑句

御荷川のなごり床しき水の秋

紅果



庭園

上段の間、付書院から眺める多宝塔、西乃屋形、各種の春日灯籠。六尺に及ぶ大雪見灯籠を配し、さくらみかげ石の大架け橋。

藩主利家と同じ尾張への郷愁から植えた北陸の地には成育はしないという樹齢四百年以上といわれる山桃を縫つて、名石、奇岩を擁する濡れ縁にせまる曲水、落水の妙。

まさに小堀遠州好みの『真の庭』の代表的な庭園として、たかく評価され加賀文化のふかき、歴史の重みをたたずむここに感じられてならない。

武家屋敷跡 野村家 A 32152

金沢市長町1丁目3番32号・電話(076)221-3553
http://www.nomurake.com

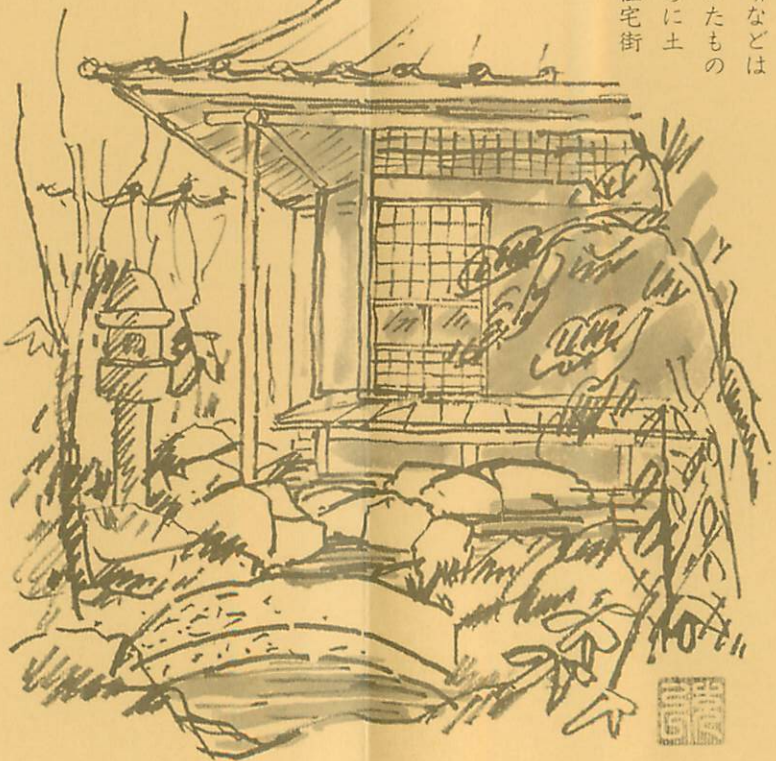
野村家跡

天正十一年（一五八三）藩祖前田利家が金沢城に入城して、加賀百万石の基礎が築かれたのである。直臣として従った野村伝兵衛信貞家は、禄高千石から千二百石と累進して、代々を御馬廻組々頭、各奉行職を歴任し、この地に千有坪（三千平方米余）の屋敷を拝領し、家督は十一代にわたって、明治四年の廃藩に至った由緒ぶかい家柄である。

武家制度の解体で、あたりの多くは菜園となったが、幸い門、土塀などは従来のままの姿を残していたものの、大正初期の窮乏でさらに土地は分割されて、現在の住宅街と変貌したのである。

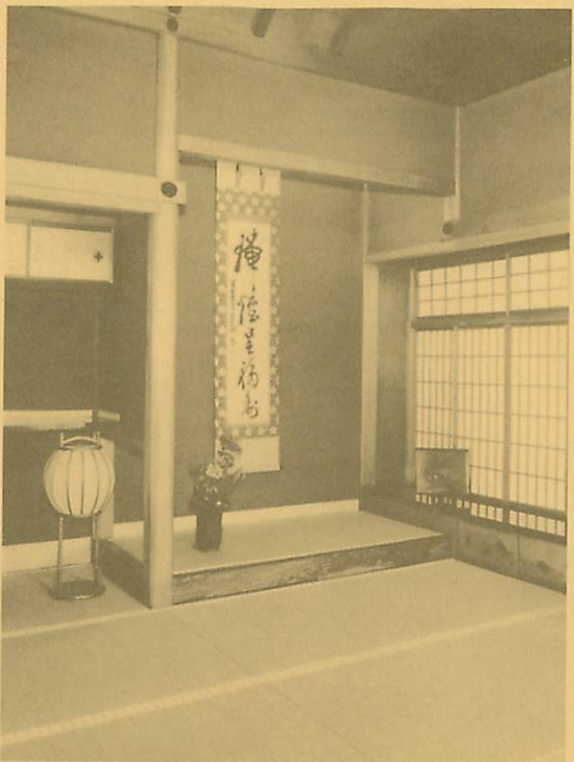
当野村家も古木、曲水の庭園の一部を残し、館を取り払い分割されていくたびか住人を変えたが昭和初期に至り、藩政時代、『北前船』船主で遠く蝦夷地（北海道）などと通商した、加賀の支藩大聖寺藩下橋立村の傑商久保彦兵衛が、藩主を招いた豪邸の一部の上段、謁見の間を移築して現在に至っている。

格調高い武家屋敷の奥深い庭園を偲び、一方陰で藩政を支え北海の怒濤（どとう）にいどんだ豪商の館から、住時の栄華、文化を汲み、先人の歩みを知るのも現代人に必要な知識、条件といえよう。



上段の間

金に糸目をつけない総檜づくりの格天井の上段の間は、紫檀、黒檀材を使った緻密な細工造りで、畳下が桐板張りであることも驚きである。金彫師の手によるものと思われる黒柿材の透かし彫りの釘隠し、襖の引き手は鉄刀木（タガヤサン）の細工彫で出来ている。濡れ縁にせまる曲水を映ゆるギヤマン入りの障子戸は往時弘化、嘉永年間としてはまさに目を見張ったことに違いない。



襖は狩野派の最高峰である法眼位の佐々木泉景筆による雄渾なる山水画、地袋の遊亀の図は代表的作として、たかく斯界から評価されている。加賀法眼と称された泉景が商家におもむいて揮毫した経緯は定かではないが、貴重なる文化遺産である。